

---

# 魔法戦記リリカルなのはグレイヴ

不知火仁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのはグレイヴ

### 【Nコード】

N7318P

### 【作者名】

不知火仁

### 【あらすじ】

かつて、最強と呼ばれた殺し屋がいた。しかし、彼は組織を裏切った。

光を求めるために。

だが、そのために彼は記憶を失い・・・

最強と呼ばれた男となのはたちが出会うことで一体どんな結末が待っているのか？

《本作品は設定などでブラックキャットや、一部キャラクターを使用予定です。》

また、残酷的な描写も含まれる話もご注意ください（今現在はなし）《

今作品のヒロインはすずかまたはアリスの予定

## プロローグ（前書き）

まずは、この作品を読んでいただきありがとうございます

新連載ということで始めました。

この作品はハッピーエンドは薄いのであまり期待しないでください  
長期連載の予定ですが50話で終わればいいかなーと思っています  
ゆるくやっっていくのでお願いします

感想もよろしくね

## プロローグ

彼は、闇の中で生まれ、生きてきた。彼にとって光とは手の届かないまるで宝物をよつだった。あえてわかりやすく言うなら光を太陽と例えよう。太陽は朝になれば昇るし、夜になれば沈む。それは人に、誰もが平等に与えられた権利。しかし、彼が求める光は太陽ではない。もっと、暖かい、優しい光。

彼はそれを求めるようになった。  
あの子との出会いで

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

俺は、平たく言えば殺し屋だ。  
言われた通りに人を殺す。それが俺の仕事だった。俺には人並みの欲はなかった。ただ、生きる。それだけだ。

そんなある日のことだ。俺は街を歩いてたんだ。昼は大勢の人がいる。こういう職業についている所為か観察をしてしまう。人にはたくさん種類がある。それがわかってしまう。

幸せな人間。不幸な人間。可哀想な人間。欲を求める人間。目立ちたい人間 e t c . . .

人は怖い。

話を戻そう。

何故、殺し屋である俺が昼間の町中にいるのか。いわゆる、下見。どんな場所でも自らの目で確かめなければならぬ。

下見を終えた俺はなにも考えず歩いてた。ただ、歩いてた。

多分、街を離れた少しの場所に出たのだろうか。公園・・だと思っ。そこは広く街にいた時よりも光が差し込んでいた。

「眩しい」

そう、眩しかった。俺にはこの世界が眩しかった。

「ねえ、お兄ちゃん」

「！」

俺は不意に声をかけられてことに驚き、胸に隠してある銃に手を伸ばした。

なぜ、気配に気づかなかったのか。先ほどまで、いなかったのに目の前に小さな女の子がいる。

俺は脅威がないと判断した上で銃から手を離れた。

「なんだ」

「お兄ちゃんはサボテンって知ってる？」

一体この少女はなにを言っているのだろうか。  
とりあえず、俺は変な風に思われないように普通に普通に応えた。

「ああ、知ってる」

「サボテンの花言葉はね『暖かい心』なんだって。お兄ちゃんは暖かい？」

なんなんだ。この子は。  
だが、今は話を合わせるしかない。

「俺の心は・・・冷たいよ」

「そうなんだ。でも、サボテンだってこんな痛い棘をしているのに『暖かい心』なんだからお兄ちゃんもきつと暖かいよ」

「そうだと・・・いいな」

「けど、サボテンもここに生えてる草も木もいつかは枯れちゃうんだよね。人も、動物も息とし生けるモノ。建物も大事なモノみくんな。無くなっちゃうんだね」

それを聞いて俺はなにを血迷ったのだろうか。

首にぶら下がっているペンダント 丸い球体をした宝石を掴み取る  
と不思議なことにそれは本になった。

彼は適当に開くとただ一言『蒐集』と呟いた。

すると少女が持っていたサボテンは光の粒子となって本に吸い込まれた。

「え、すごい！どうやったの!？」

彼は一度本を閉じ、再び開いた。すると先ほどのサボテンが現れた。  
少女はサボテンに触ろうとするが通り抜けてしまった。

「触れないよ？」

「ああ、触れない。けど、このサボテンは一生この中に残る」

「へー、でも・・・私は嫌かも」

「どうして?」

「だって、せつかく生きているのに死ねないなんていやでしょ？始  
まりがあれば終わりもあつてそして、始まりに戻る。生きているも  
のは皆証を残せる。それは子供でもあり、名前でもあり。だから、  
ずっとそのままなんて可哀想」

そんなこと考えたことはなかった。ずっとこのサボテンのように永  
遠の形を保つことが可哀想なんて思ったことはない。



「ねえ、お兄ちゃんはこの世界が好き？」

「・・・わからない」

「そっか。だったら世界を見て廻るといいよ」

「なぜ？」

「お母さんが言ったの。世界は広くて自分の知らないことが一杯あつて。だから、お兄ちゃんにもいつかなにかを得られると思うよ」

「なにかつてなんだ」

「だって、それは人それぞれ。欲しいモノ、見たいモノ、触れたいモノ・・・一杯あるんだよ。だから、お兄ちゃんは自分が求めているモノを見つげるんだよ」

俺が・・・求めているモノ・・・

「じゃあ、私いなくなっちゃ」

「え」

「バイバイ、お兄ちゃん！」

その時の、少女の顔は覚えていない。ただ、覚えているのは俺の方に向けたその顔、日差し、風景をみて俺は“光”を見た気がした。暖かくて眩しい光を。

そして、夜になり俺は自分の仕事をしていた。屋上でライフルを構え、スコープを覗き標的を定めていた。あとは引き金を引くだけだった。

お兄ちゃんは自分が求めているモノを見つけるんだよ

俺の求めているモノ……

先ほどからその言葉が頭から離れない。ただ、その戸惑いが俺にミスを犯した。いつもなら一発で仕留めれるはずなのにミスを犯したため2発目で仕留めた。咄嗟に撃つたので標的を逃がすことだけはなかった。

今日のミスについて組織に戻ると話題に取り上げられた

『任務は無事成功。だが、初弾を外すとはどうした？』

「別に。俺のミスだ」

『ミスか。お前にミスなど存在しない。お前は最高で最強の殺し屋だ。ミスなど在于てはならない』

「・・・」

そして、俺は部屋に帰る。

四角い部屋。当たりは黒くまるで闇の世界だ。窓も何もない。あるのは出入りする扉だけ。

しかし、その扉も俺自身の手で開けることはできない。

必要があれば出され、用がなければこの空間に閉じ込められている。

俺はふと考えていた。

“俺の求めているモノ”とは何か

世界は・・・広いのだろう。任務の度に外に出るがその地名や名称など俺は知らない。いらぬから。

けど、何故だろう。当たり前前のことを俺は知りたくなってきた。

あの時見た光。少女の顔、日差し、風景・・・俺はあれが欲しいと思った。いや、見つけたいと思った。アレがなんなのか。あの光は何故、暖かくて眩しかったのか。

俺は気づけばそういう衝動に駆られて自らの意志で動いた。

そして、初めてその扉を開けた。

組織を出る。それは裏切り。

そう俺は組織を裏切ったのだ。

追手が俺を連れ戻そうとやってくる。しかし、それは違うだろう。

裏切りモノには死を。それが組織の掟。

だが、俺に後悔など初めからなかった。生まれて初めて自分の意志で生きている。そう実感していた。

だが、組織の力はやはり凄まじかった。

最終的には同じ、称号を持つ12人に追い詰められた。

彼らは言った。

『何故、裏切った』

『お前程の男が何故裏切る』

『所詮はなにも知らない人形か』

『やはり、お前は殺し屋としては最高だが人としては未熟だった』

などなど。

だが、俺はその言葉を耳にしていなかった。

俺は生きる

生きて、探し求める

俺が見たあの光を絶対に見つける

あの光がなぜ暖かく、眩しかったのか

その答えを俺は追い求める

そのために俺は 奴らに引き金を引いた。  
だが、1対12。抗うこともできず、俺は暗闇の底へと消えた。

この“世界”から俺は消えた

\*\*\*ミッドチルダ 某自然地帯\*\*\*

ここはミッドチルダでも有数の自然地帯でこの調査のために多くの学者たちが訪れている場所でもある。

未だに発見されていない動物や植物も多く存在する場所でもある。  
そんな場所に一人の男が何かを探していた。

「……特徴からしてこの辺りだと思っただけ……」

彼の近くに表示されているウィンドには綺麗な花が映し出されている。  
る。

「……お、あった。あった」

彼は探していた花を見つけると分厚い本を開きただ一言

「蒐集」

すると花は光の粒になり本へ吸い込まれてゆく

「よし。じゃあ、帰るかな・・・？」

目的を果たしこの場から去ろうとしようとしたがなにかを感じた。  
辺りを見回してもなにもいない。

ザザ・・・ザザ・・・

「なにか・・・いる？」

そして、彼の前に現れたのは丸い形と枕みたいな形をした機械が現れた。

逃げろ・・・アレはお前を・・・

誰かが頭に訴える。僕はそんなこと言われなくても

「逃げる! ! !」

## プロローグ（後書き）

明日辺りに1話を更新する予定です

やっぱり、すすか、またはアリサENDがあってもいいよね



## 六課との最初のお会い（前書き）

どうも、不知火です。

やっぱり六課陣はあまり出ない空気になりつつあるようです。

## 六課との最初の出会い

\*\*\*ミッドチルダ 某自然地帯\*\*\*

「はあはあはあ・・・くそっ！」

なんで、僕は走ってるんだっけ？

先ほど起きたことを整理する。

探していた花がみつきりそれを蒐集したまではいい。だが、いきなり今追われている変な機械が現れて・・・

よし、思い出した。

「って。思い出してもなにも変わらないじゃん!」

泣きながら前へと走る彼。

敵の数は小さいのが5機。デッカイ丸が1機。  
どうする？考えるんだ!

そもそも何故、自分が追われているのかわからない。

別に蒐集した花は立ち入り禁止区域にあったわけでもないし、指定  
されていたわけでもない。  
なら、どうして？

もしかして、狙われているの・・・僕？

いや、全然見当がつかない！

こっちで何か問題起こしたわけじゃないし。

だけど・・・逃げていても埒があかない。

彼は今まで弱気だった思いを捨て前向きに動き始めた。

そして、彼の腰に備え付けているある物に手をかけたその時だった  
！！！！

ドン！ ドン！

いきなり背後で爆発が起きた。

彼は足を止め、後ろを振り向いた。

そこには機械の残骸が2機転がっていた。

「大丈夫ですか！？」

するとどうだろう。  
空から美女がやってきたよ。  
しかも、杖を持って、ミニスカで。

「え、ああ」

「下がっていてください」

「あ、ああ」

「アクセルシューター・シュート！」

3つの光の球が小さい方に迫る。一瞬、そいつの前で止まったように思えたがすぐに貫通した。  
そして、残ったのは丸いデカイ奴。

「フェイトちゃん。いいよ！」

「ハーケンセイバー！！！」

真上からくるくるとなにか落ちてきてそのまま最後の1機を真つにつにした。

彼は再び上を向くと今度は金髪の美女がやってきた。

「凄いですね」

俺は感謝の意味を込めていった。

「それより、あなたはどのようにしてこんなところだ？」

「こんな場所に一人で冒険？」

「似たようで違うかな？」

「とりあえず、六課まで御同行願います」

「一応事情聴取ってことで」

「六課？」

「はい。時空管理局、古代遺産物管理部、機動六課です」

管理局・・・次元を管理する者たち・・・古代遺産・・・ロストロ  
ギアを確保、封印・・・

しかし・・・裏では非合法な実験を行う者いる・・・

「・・・」

「どうしました？」

「い、いえ。それじゃあいきましょうか」

こうして、僕は二人に連れられ空に待機していたへりに乗っけられ機動六課へと連行されたのだった。

\*\*\*機動六課 取調室\*\*\*

「カツ井まだ〜？」

「でるわけがなからう」

普通にツッコマれました。今僕は、事情聴取を受けているところで

す。  
あ、目の前にいる人はポニーテールの女性。なんか胸がデカイよね。

「なんだ……。じゃあ、帰る」

「そんな権利がお前にあると思うか？」

「……すみません」

「さて、事情聴取を始めるか。貴様、名前は？」

「……」

「貴様はどうやらこちらの世界の人間ではないらしいな。本局にも問い合わせしてみたが貴様のデータが存在しない。不法入国、と言いたいが・・・」

「気づいたらあそこにいました（棒読み）」

「貴様、本当のことを喋った方が身のためだぞ？」

「なんで、そんな危ない組織に捕まったようなことを言われなければならぬんだ？」

「だって、この人も六課の人なんだろう？  
しかし、まあ・・・黙ってても・・・」

「はー。わかった。僕の名前は“リユーゲ”。見ての通りの男だよ」

「では、リユーゲ。貴様はあそこでなにをしていた？」

「花を見つけない」

「花？」

「ええ。あそこにはまだ発見されていない植物も多いですから  
「なるほど。お前の目的はわかった。」

「一応さつきお前の身体を調べていたが特になにもないようだよ」

「あれ、心配してくれているのかな？」

さつき、なんか医務室に連れていかれて健康診断を受けてたけど・  
いきなりなにをするのって感じだったな。

「あ、そうそう。僕を助けてくれた二人はどんな人ですか？」

「なんだ、ナンパか？」

「違いますよ。助けてくれた人の名前ぐらい教えてくれたっていいじゃないですか？」

「ふむ、そうだな。白い魔導師が“高町なのは”。黒い魔導師が“フェイト・T・ハラオウンだ”

「へーあの二人がそうなんだ」

ム

シグナムはその言葉に反応した。

身元不明。名前しかわからない目の前にいる男はおそらく次元漂流者だとは推定していた。

だが、そんな男が“高町”と“テストロッサ”のことを知っていると言った。

しかし、“これ”の説明がつかん



「では、“これ”はなんだ？」

机に出されたのは一つは彼が持っていた本。そして、もう一つは銃の形をしたモノだった。

「この本は調べた結果、魔道書に近いものだとわかった。しかし、我々の手では誰も開くことはできない」

「当然さ。それは指紋認証みたいな装置が付いている。僕以外の人間には開くことはできない」

「そうか。なら・・・」

やっぱりきたか・・・

「これは、どう説明する？」

「護身用、って言ったら信じてくれます？」

「まあ、信じなくもない。ただ・・・問題はこれに使われている中身のことだ。

これは“質量兵器”だ」

「質量兵器？」

彼女が言うには、管理局が管理している世界のほとんどが質量兵器を禁止しているらしい。

質量兵器とは、簡単に言えば実弾を使った銃のことらしい。

「そつだ。だから、ここではこれはあつてはならないものだ」

「って、言われてもこれは一応身を守るために必要なんですけど」

「お前の言い分はわかる。だがな……」

そつやって渋って渡さないつもりなんだろうけど……

しかたない

「あ、先ほどはごつも」

「ん？」

彼がそんなことを言うつとシグナムは一瞬だけで気を緩め後ろを向いた。

しかし、そこには誰もおらず

「おい、貴……」

彼女、シグナムは目を疑った。先ほどまでいたあいつはその場から消え、さらに本も銃も消えていたのだった。

「やられた」

後で、監視カメラで確認したが微量ながら魔力が検知され、テレポ  
ートしたと判明した。

\*\*\*地球 海鳴市 星祥大学校門前\*\*\*

「じゃあねー」

「うん、また明日」

友達と別れをつげ親友と一緒に帰る。

「すずか、いきましたよ」

「うん、アリサちゃん」

二人は校門に向かって歩きはじめる。

「それにしても、あいつがいなくなって早3日。そろそろ帰ってくるころかしら？」

「なに、心配しているの？」

「ば、馬鹿！そんなんじゃないわよ！……ど、どうせ、あいつのことだから今回もボロボロになって帰ってくると思って……」

「はいはい。けど、そろそろ戻ってきてもいいころだと……あ！」

「ん？ あ！」

二人の視線は校門前に立っている不審な自分に目を向けた。それもその筈だ。マントを羽織り尚且つボロボロなのだ。

「ただいま。すずか、アリサ」

「“グレイヴ”！あなた、またそんなボロボロで帰ってきて！」

「あはは。ごめん。あ、心配してくれたの？」

「あんななんか心配するわけないじゃない！」

「それは、それで酷いな……」

アリサは先ほどと打って変わって怒っているが本当は心配している

のだ。

簡単に言えば、自分に素直になれないのだ。

逆にすずかはゆっくりと彼に近づき笑顔で言った。

「おかえりなさい。グレイヴ」

「うん。ただいま、すずか」

「で、もしかしてあたしたちを迎えにでも来たわけ？」

「うん」

「へー。あんたにしてはよく考えたわね。じゃあ、ご褒美にバック、持たせてあげる」

「・・・帰ってきたばかりなのに酷い仕打ちだ」

「あはは。じゃあ、帰ろうか」

「そうね」

「ああ」

そして、三人は一緒に歩きはじめる。

これが、彼“グレイヴ”の今帰るべき場所である。



## 六課との最初の出会い（後書き）

リュゲとはドイツ語で嘘という意味です。多分

ですからグレイヴというのが主人公の名前になります。

次話は多分、回想シーンになるやもしれません。  
最初のうちは回想話が多いです。

今年中にはあと一話はいきたいなあ

では、また次回で

## 出会い（前書き）

今回のお話はすずかとお会ったときのお話です

もう、年が明けますね！。

早いものだ



## 出会い

\*\*\*地球 月村家 グレイヴの部屋\*\*\*

地球に帰還してから次の朝。  
彼、グレイヴは普通に起きていた。ただ、何かをするわけでもなく  
ただ外の風景を眺めていた。

コンコン

「すすかです。入ってもいい？」

「すすか？いいよ。開いてるから」

そう言うとなすすかは部屋に入ってきた。

彼女は扉を閉めると彼が座る椅子の前に座った。

「で、何の用？」

「うん。グレイヴが昨日探していたモノがみたくて。いい？」

「うん。いいよ。でも、大学は？」

「大丈夫。今日は午後からだから」

「そっか。じゃあ・・・」

彼は胸についているペンダントをとった。すると分厚い本になる。そして、彼は適当に開くと開いた上に、花が現れた。

「へー、これがグレイヴの探していた花？」

「うん。心の花って言って。心の大樹っていう珍しい木の種から咲くみたい。」

それを僕がいった場所でみた人がいたらしくてね。それで行ってきたんだ」

「綺麗だね。どんな花よりも綺麗・・・」

「僕もそう思うよ」

「けど、触れないのがやっぱり残念」

そう、これは触れないのである。いわゆるデータ化しているのだ。だから、実物そのものを蒐集したのにデータになってしまっから触れないのだ。

「けど、永遠にこの形を保つことができる」

「そうだけどね。じゃあ、心の大樹を見つけたらそれも？」

彼は顔を横に振った

「しないよ。だって、そんなことをしたらもう二度と心の花は咲かないから」

「うん。私もそれがいいと思う」

彼女は笑顔で応えてくれた。

「そういえば、すずかの友達に会ったよ」

「え？」

「会ったって言うか助けられた」

「ど、どうして?..」

彼は経緯を離した。花をみつけたら変な機械に襲われてそこにすずかの友達が助けしてくれたことを。

「えーと、名前は高町なのはとフェイト・T・ハラオウンって言う」

てた」

「そっか。なのはちゃんとフェイトちゃんに。お礼はちゃんと言った？」

「言う前に逃げてきた。だって、いきなり事情聴取受けさせられたんだよ？」

「まー仕方ないのかな」

「それと、僕の事は」

「うん。わかってる。言わない。それが私とグレイヴの約束だから」

「ありがとう。すずか」

そう、すずかからは話は聞いていた。名前だけは知っていたけど実際にあったことはなくすずかから聞いてそれなりの人柄はわかったけど、自分のことを色々と探れるのは困る。

よく、二人が遊びに来ていた時があった。僕は事前にそれを聞き、どこかへいつていた。

しかし、会ったことはないがみたことはある。彼女らが小さい頃に

「それにしても、もう10年なんだね。僕とすずかが出会ってから」

「うん。早いね・・・」

そう、10年。

僕とすずかが出会ってからもうそれだけの月日が立っている。

10年前

グレイヴがすずかと出会ったのは10年前。  
時期で言えば、なのはがフェイトと決戦する少し前ぐらいになる。

\*\*\*月村家 裏庭\*\*\*

「……?」

「お嬢様、どうかしました?」

すずかの専属メイド。ファリンは聞いた。

二人は今裏庭で猫を探しているのだ。ある一匹が裏庭へ行ってしまう  
今目下搜索中なのだが裏庭の向こうの茂みになにかを感じた。

すずかはその場においても仕方がないと思いその気になる方へ向かって  
みた。

最初はゆっくり歩いていたがだんだんそれは早くなっていく

「あ、お嬢様待ってくださいーって痛!」

ファリンも追いかけてようと走るがメイド服の裾を踏んでしまい転ぶ。それでも起きあがりすずかの元へ走る。

「はあ・・・はあ・・・」

すずかの息は荒い。どちらかと言えばすずかは運動は得意な方である。そんな彼女は息を切らしている。まるで、焦っているようにも見える。

「にゃ～にゃ～」

「！そこにいるの？」

行き先には探していた猫の声が聞える。すずかは猫の元へ急ぐ。

だんだん、猫の声は大きく、近づいている。そして、声の元へ辿りつく。

「あーよかった。もう、どこに・・・」

「にゃ～にゃ～」

しかし、猫はすずかの方へは向かない。  
目の前を向いている。  
すると、何か見えた。よく、覗いてみるとそれは足だった。

「え！」

すずかは駆け寄った。怯えることもなくただその主に駆け寄った。  
目に写ったのは人だった。ボロボロで血だらけの男だった。頭から  
足にかけて血は流れ服は斬れ、穴も開いている。

「だ、大丈夫ですか!？」

普通の子供なら怯えてもいいのにすずかは怯えることは愚か彼にか  
けよっている。  
それと同時にファリンもやってきてそれに驚くがすずかが

「ファリン！ノエルを呼んできて早く！」

「え、え『早く！』は、はい！」

どちらかと言えばすずかが冷静だった。  
すずかは彼を地面に寝かせ息をしているか、心臓が動いているか確

認した。

子供でここまでできれば大したものだと言いたいが本当に凄いことだ。

「・・・あ・・・あ・・・ぐ・・・」

「よかった。まだ、生きてる・・・」

すずかはとりあえず、安堵するがそうはしてられない。

まずは・・・血を止めないと。でも、どうやって・・・

このままでは大量出血で死んでしまう。

しかし、再びすずかは目を疑うことになる。

「え・・・でも、こんなことって」

傷口をよくみていたら不思議ないや、奇妙な現象が起きていた。

傷のある端からほんの少しずつそれもミリ単位で塞がっているのだ。

それをみたとすずかは余計にどうしたらいいかわからなくなっていた。

数分後

ノエルと救護班を連れてきたファリンらがやってきた。



そして、彼女らの手当てのおかげ命を取り留めたとすずか以外は思った。

彼を助けてから数日が過ぎた。すずかは、学校がある日は朝と、夜に見舞いに訪れ、休日は用がない限りはずっと看病していた。

ファリンやノエル、周りの人からは止められていたがすずかは言うことを聞かなかった。

そして、周りになによりそう言ってたのは彼自信のことだ。

あんな大怪我だったのに関わらず数日で傷はすべて塞がり、完治していると言っている状態なのだ。  
だから、彼女達は思ったのだ。

人間ではないと

それはすずかもわかっていたことだ。  
いや、誰よりも一番に気付いた。  
だけど、恐怖はなかった。

「……ん……」

「！」

「……」

彼はゆくつり目を開け口を開いた。

「気づきましたか？」

「・・・君は？」

「私の名前は月村すずかです。あなたは裏庭で大怪我をしてたところを私たちが助けました」

すずかはわかりやすく丁寧に説明した。

「そう、なんですか？」

「覚えていないんですか？」

「わからない。わからないんだ。自分が誰なのかも」

これは記憶喪失だ。  
すずかは直感した。

「落ちついてください。今、人を呼んできますから」

そういつとすずかは部屋から出てノエルたちを呼んできた。

専門の医師も記憶喪失で間違いがないと言っていました。

おそらく、怪我を負った時のショックで記憶を失ってしまったのかもしれないとよくありがちなことを言っていた。

けど、問題はそこからだった。

彼をどうするか？

それが一番の問題だった。

一部の人は彼が人でないと言っているが私は彼が同じ人間だと思っている。

それに、記憶もない人がどうやって生きていくのだろうか？

だから、保護という形で私たちは彼を受け入れました。

ちなみに、彼のことは絶対外部に漏らさないという掟ができました。理由は色々です。

「でも、名前どうしましょうか？」

「……すずかちゃんなら、お兄さんでもいいと思うけど他の人たち……」

確かにそうだ。

私は子供。彼は大人。だから、お兄さんでいいのだがノエルやファリン、それにお姉ちゃんがなんて呼べばいいか。

ファリンは

「別に、お兄さんでもいいんじゃないですか？」

ノエルも

「ええ、私もお兄さんと呼びます」

と言うことになりお姉ちゃんは「あなた」とかそういうことになりました。

そして、ある日のこと。

それは、お兄さんの一言から始まりました。

「そういえば、今日って何日なの？」

そう、お兄さんの部屋にはカレンダーがないのです。

だから、私は卓上のカレンダーを持って行ってあげました。しかし、異変は起きました。

別に今日は13日じゃないのに。

「・・・13日・・・13・・・??・・・サーティン・・・うー!!」

・・・今日から・・・は・・・最高の・・・号を得る・・・

さすが・・・な・・・ティン・・・

や・・・りすい・・・ね。サー・・・は

あら・・・じゃないの・・・どう？・・・にいかない？

「お兄さん、大丈夫!？」

「あ・・・大丈夫だよ、すずかちゃん」

今は「すずか」と呼んでいるけどこの時はちゃん付けで呼んでいたのをよく覚えている。

それから、お兄さんは街に行きたいといいました。

でも、あんなことがあったんだから外に出るのは危ないと私は言いました。

けど、お兄さんはそれでもいかなきゃいけないと言って・・・だから、一時間だけ許可しました。皆に気づかれないルートでお兄さんを連れ出して。

私も外に連れ出すとこまでしかついていないのでそのあとお兄さんがどこへ向かったかは知りません。

\*\*\*海鳴臨海公園\*\*\*

なぜ、ここに来たと言われれば僕はわからないとしか言えない。ただ、感じた。それが答えになるのかはわからない。

僕は感じるままにここへやってきた。

海がみえる綺麗な場所だった。

ただ、他とは違っていた。そんな気がした。  
そして、その“感じ”がなんなのかわかった。

海の上で戦う女の子が二人。

白と黒の戦い。黒の方が優勢にみえると思ったが違つ。

白いのが勝つ

その言葉がよぎった。だが、そんなことより・

「あれは一体・魔法使い？」

空を飛び、何より杖を持っている

あれ・魔導師・つ・は・

デバイス・ばれる・意志を・た・機械

「魔法・なのか？」

魔導師と呼ばれる二人。だから、魔法の力で戦っているのだろうか？

正確には・・・魔力・・・力を・・・者は・・・リン・・・コアと呼・・・れるモノ・・・が・・・在する

「魔力」

「デバイス」

何故だ。知らないのに、知っているような気がする。

「受けてみて！デバインバスターのバリエーション！」

声が聞えた。

何故か、僕はもう勝負がつくと思った。そして、結果をみずに僕はその場をあとにし月村家へと向かった。

\*\*\*月村家\*\*\*

僕は家を出た手順と逆に家に戻った。

ちよつと、冒険気分だったけどみつかればすすかちゃんに迷惑がかかる。

そして、無事に部屋に辿りついた。

「ふー。それにしても・・・魔導師、デバイス・・・」

先ほどの出来事を思い出す。

アレは、きつとこの世界のモノではない。

それに、あの小さな女の子は遠くてよくわからないけど多分、すずかちゃんと同じ年頃だ。

あんな小さな子が戦っている。

あの世界は少しズレている。

「一体なんなんだ。自分のこともわからないのに余計に混乱してきた・・・」

ふと彼は気づく。自分がペンダントを身につけていたことを。

彼はそれを手に取る。

すると、光が輝き一つの分厚い本になった。

それ・・・ね？・・・たのために・・・くったの・・・  
こ・・・で・・・世界・・・録・・・永遠・・・残・・・わ・・・

「“世界の記憶”？・・・これが本の名前？」

彼は気になり本を開けた。

すると、小さな四角が一杯現れた。その中には色んな絵が写っている。

彼はそのうちの一つを押す。現れたのはサボテンだった。



「サボテン・・・？」

彼は、恐る恐る触れてみようとしたが指は揺れることなくすり抜けた。

「どっして・・・」

・・・れ・・・蒐集し・・・モノを・・・のその・・・ことが・・・けるど、そ・・・子化・・・ータにな・・・か・・・れるこ・・・きないの

蒐集？永遠に残せる？

頭にこの本の使い方が流れてきた。

彼は気になってしまい、たまたま部屋にあった花瓶に向けて

「しゅ、蒐集・・・」

どういうことだろうか。花瓶は光となり本に吸い込まれてしまった。

「これは・・・！」

その日から数日後

今度は、世界に少し異変が起きた。

原因は、時の庭園での出来事が原因で地球にも僅かながら影響を及ぼしていた。

しかし、そんなことを人は知らない。

だが、グレイヴは異変と呼べるモノに気付いた。

これ・・・次・震・・・次元の・・・起き・・・他世界・・・も巻き込む・・・

「次元震・・・何かが起きている」

しかし、自分にはどうすることもできない。

だが、再び何かを感じ取っている自分がいる。

では、どうすればいいのか。なにもできないながら彼は考える。

イメージ・・・すれば・・・目的・・・いける

「イメージ・・・」

だが、彼にはイメージするべき場所がない。だから、その感じている・・・それを強く思った。

「お兄さん！」

すずかが慌てて彼の部屋に入ってきた。

「お兄さん・・・？」

しかし、彼は部屋にいなかった。

\*\*\*時の庭園 内部\*\*\*

「なにしに来たの？」

「あなたに言いたいことがあってきました」

今に崩壊している庭園内でプレシア・テストロッサと彼女によって生み出されたフェイト。

フェイトは彼女に伝えるために来た。

「私は アリシア・テストロッサじゃありません。あなたが作ったただの人形かもしれません」

「だけど、私、フェイト・テストロッサはあなたに見出してもらって育てて貰ったあなたの娘です！」

「ふふっ、ははははあつ。だからなに？今さらあなたを娘だと思えと？」

「あなたがそう望むなら・・・世界中のどこからも誰からもあなたを守る。私があるの娘だからじゃない。あなたが私の母さんだから！」

「・・・くだらないわ」

「・・・母さん!!」

すると天井が崩れ二人の間に落ちる。  
その瞬間がフェイトの見た最後のプレシアだった。

「さあ、いきましょう。アリシア」

そして、彼女の足元も崩れ、プレシアとアリシアはなにも無い空間へと堕ちてゆく。

「ああ、アリシア、私たちはいつまでも一緒よ・・・」

## 蒐集

そこで、彼女の意識はなくなった。同時に彼女は光となった。

## 現在

昼が過ぎ、すずかは大学へと向かった。

グレイヴはまだ自分の部屋におり、10年前の出来事を思い出していた。

「本当、あの後はたいへんだったな。すずかにどこにいたのって問い詰められて・・・」

『あなたも色々大変だったのね』

「まあね。でも、あなた程じゃないですよ。“プレシア・テストアツサ”」

彼はもうこの世にいない人の名を呼んだ。

しかし、どう言っても彼女は彼の目の前に立っているのだ。

時の庭園で消えた

大魔導師 プレシア・テストロッサがそこに

出会い（後書き）

プレシアが生きてた？  
ということとは・・・

次回更新は来年です

では、よいお年を

死者は生者となりて（前書き）

あけましておめでとじいねいませ

今年初めの投稿になります



## 死者は生者となりて

\*\*\*月村家 グレイヴの部屋\*\*\*

「最近調子はどうです？プレシア」

「ええ、いいわよ。でも、年をとらないっていいわね」

今のプレシアの姿は10年前と変わっていない。むしろ、そのままだ。

グレイヴは彼女と出会う前のことを知らないが知っている者がいたらこう言うだろう。

「まるで、別人だ」と

今の彼女はある意味フェイトが望んだ彼女の近い存在である。

昔ではありえなかったが今ではこんなにも笑っている。

では、何故彼女はここにいるのか。

それは再び過去に遡る

\*\*\*10年前 月村家\*\*\*

母さん

ああ、フエイト。ごめんなさいね。

私は、あなたに酷いことばかりしてしまった。ごめんね。でも、あなたはもう自由よ。

だから、私の事なんて忘れないさい。こんな酷い母親のこと・・・

「・・・」

意識が戻る。

私は、あの子に謝っている夢をみた。あの時、私は素直になれなかった。

けど、そうしなければあの子はいつまでも・・・

「・・・？」

はて？

ここは、どこからしら。感覚としては不思議な気分である。

私は、閉じていた目を開ける

最初に写ったのは天井。

次にわかったのは私はベットで寝ていたこと。

ここは天国かしら？

「目が覚めたようですね」

声がした。

どうやらここは天国ではないらしい。

「あなたは？」

私はつい、いつもの口調で強く警戒するようについ言ってしまった。心ではわかっているのについそうしてしまっ。

「そう聞かれると困るんですけど・・・僕、名前ないんですよ。だから、“あなた”でいいですよ」

一体目の前にいる彼はなんなのか？  
名前がない？

変な人だと私は思った。

私は、彼に一番聞きたいことを尋ねた。

「どうして、私を助けたの？」

「わかりません」

「わかりません・・・ですって！」

「何故、僕があなたを助けたかはわかりません。けど、助けたいという気持ちはありました」

「あなた・・・矛盾してない？」

「かもしれません」

「ますます、不思議だ。」

「・・・私は生きているの？」

「そう、表現することになるのでしょうかね」

「?どういふこと」

「わかりませんか?あなたには肉体はないんですよ」

彼はなにを言っているのだろうか。

私に肉体がない?現に私は身体感覚はあるし、実際に触れてもいる。

「あなたかみれば確かに自分の身体と呼べるものはあるでしょう。けど、僕からみれば」

そう言うと彼は手を伸ばしてきた。

いきなりなにをするのだろうかと思っていたがそのまま彼の手は私の胸を通り向けたのだ。

「!!これは、一体どういうこと!?!」

「順番に説明します。まずは、私があるをこの本“世界の記憶”に蒐集しました。

これにより、あなたの肉体ごとこの本に“データ”として保存されたのです」

「ちょっと待ちなさい」

「なんですか?」

今、彼はとんでもないことを口走った。

それは、元科学者だった私にだってわかっていることだしそれはありえないことだ。

「元科学者として言わせてもらっけど、人間を“データ化”するなんて不可能よ。

それこそ、天変地異。すべてひっくり返るわ」

「しかし、現にあなたはデータ化し、今こうして“幻体”として存在している」

「確かにそうよ。けど・・・」

「討論するのはやめましょう。これには終わりがないですから」

「え、ええ。そうね。それと、アリシアは？」

「アリシア？ああ、あの女の子ですか。あの子なら」

彼は本を開いた。すると、私の隣に眠ったままのアリシアが横たわっていた。

私は、思わずアリシアを抱きしめた。

こうして、一緒にいられる。それだけで、嬉しい。でも、あなたはもう・・・

「その子、アリシアちゃんですか。あなた以上に“バグ”がありました」

「バグ？」

「ええ。僕もよくわからないんですがお二人を蒐集した時に妙なデータが現れまして」

『今回蒐集されたデータにバグが発見されました。』

このままでは本書にバグが起こるか異常な事態が予測されます。

これを回避するにはデータを破棄するか、バグを取り除かなければなりません。

バグを取り除きますか？」

「と、表示されて僕はバグを取り除くことにしたんです。

まあ、そのあとは色々あって」

手動でやるか、それともこちらで処理するかを選択に別れ、自動にすると大事なデータも消去してしまう可能性があるとわかり僕は手動で行った。

それからまるでゲーム感覚だった。

ウィンドに人の形をしたデータが表示された。赤いところがおそらくバグ。

僕はそれを取り除いたのだ。

「あなたの方のバグは多分・・・病気が何かなのでしょう。すぐに終わりました。

ただ、アリシアちゃんには“死”というバグがありました」

「で、アリシアはどうなったの？」

「単刀直入に言えば、アリシアちゃんのバグを乗り除くことには成功しました」

「本当なの！？」

「ええ。この本にはデータが破損したときにリカバリーのプログラムもあつたみたいで、それでアリシアちゃんのデータのある一定の時まで復元しました」

「一定の時？」

「これを見てください」

今度、幻体として再生させたのは花だった。

「いいですか、よくみてください」

すると綺麗に咲いていた花がつぼみに戻ってしまった。そして、だんだん、小さくなり最後には土に埋まった。いわゆる、成長の逆再生。

「このように、アリシアちゃんが生きていた時のデータに復元しました。

ただ、元々バグだらけだったのでいつ目覚めるかわかりません」

「そう。でも、それだけでも」

「僕もこの本についてはよくわからないんです。初めて手にした時、使い方がわかって。それに、この本についての記憶が戻ってわかったんですが、人を蒐集したのはあなたたちが初めてみたいです」



「つまり、想定外ということね」

「ええ。“生きている”という概念は同じかもしれませんが人と植物だとまったく別のモノ。」

「ですから・・・」

「もう、大丈夫。いいの、こうしてアリシアといられるだけで私は幸せよ」

「・・・」

「だから、ありがとう」

「いえ」

「ありがとう。」

「そんな言葉が私の口から出るなんて・・・。」

「でも、可能性は少なくありません。だから、あきらめないでください」

「こんな私でもわかる。彼は私を元気づけようとしているのだ。年下の子にそんな気遣いをされるなんて。私も年をとったものね」

「・・・」

また、彼は一つだけ話していないことがあった。それは、二人のバグを取り除いたあとに『このデータを再起動しますか？』と表示され僕は再起動したのだ。

プレシアさんの場合は数日かかった。

そう、アリシアちゃんも“再起動”はしているのだ。

人間にその言葉不適切だろう。でも、データ化している彼女達にはぴったりとも言える。

だから、長い時間をかければきっとアリシアちゃんも目を覚ます。

僕は、そう信じ続けた。

現在

「お母さん」

「なあに、アリシア」

そして、現在。アリシアちゃんは数年という短くもあり、長い時間を経て目を覚ましました。

「ねえ、グレイヴ」

「なんだい。アリシア」

さすがに時がたてばちゃん付けはしなくなる

「フエイト、元気だった？」

「なんだ、聞えていたのか」

「うーん、本から聞えてたし、見えてもいたかな？」

「そうね。本を仲介して見えているといえればみえているわよ。  
それにしても・・・さすが私の娘ねーあんな大きく育って（特に胸  
が）」

「・・・あなたそんなキャラだったのか？」

「あら、なんのこと？」

・・・天然なのか狙っているのかわからない。

「さて、と」

彼は愛用のボロボロのマントを羽織った。

「もう、行くの？」

「うん。ちょっと気になることがあってね」

「いいの？なににもいわなくて」

「いいさ。すずかもわかってる」

「じゃあ、レッツゴー！」

アリシアの掛け声を聞いてグレイヴは笑みを浮かべ本を閉じた。閉じると二人は消えた。

「さあ、いくか」

死者は生者となりて（後書き）

アリシアとプレシアの生存

このままいくと？

さてはて・・・

## 衝突（前書き）

今回は原作第10話から12話をもとにしています

しかし、原作キャラ薄いですね・・・

いやね、努力してるつもりなんだけど影キャラといつかお亡くなりになったキャラの出番が多いというか・・・

とまあ！

どうぞぞ！

## 衝突

機動六課設立から数か月。

新人F Wたち4人に初めての休暇が与えられた。同時に、トレーラの横転事故が発生。そこにはガジェットドローンと呼ばれる残骸があった。そして、謎の生態ロボット。

それから間もなくエリオ・キャロが地下水路で謎の少女とレリックが発見された。

そして、今回の事件の黒幕ジェイル・スカリエッティの作品“ナンバーズ”も参戦。

六課とナンバーズのレリックを巡る戦いが始まっていた。

しかし、それを眺める者が一人……

\*\*\*旧市街地\*\*\*

空を見上げれば爆炎がいくつも起きている。綺麗な光が通った思えば爆発が起きる。

なんとも皮肉なことか。

「六課と……あのガジェットが戦っている」

彼、グレイヴも戦場へと赴いていた。  
ただ、今回は蒐集が目的ではない。

「……………!!」

するとまた遠くで広範囲に爆発が起きた。

グレイヴはまだあったことがないがこれを行ったのは機動六課部隊  
長八神はやてである。

「すごい」

『主……………』

「……………確か、君の」

『ああ』

彼の隣にいる女性。

それはかつて、“闇の書” - “夜天の書” と呼ばれ最後の騎士であり  
”祝福の風” と呼ばれた

「リインフォース、やっぱり会いたいかい？」

『会いたいといえば会いたい。だが、私はすでに消えた存在。そん



な私だが、はやての成長した姿を見ただけでもうれしいよ』

「そうか・・・ん！」

『私は戻ったほうがいいな』

彼女はそういうと消えた。

彼女もまたデータ化されたデータ人間である。

「ガジェットがこっちに向かってきている・・・やはり、僕を」

グレイヴは彼らの狙いが自分であると予測した。

そして、彼は走り出した。今度は逃げるためではなく戦うために。

チンク

私は、今日ほど今自分が行っている任務に疑問を持ったことはない。そもそも私たちはドクターのために事成していた。だから、それが正しいとか間違いとか関係がなくそれが当たり前のことだと思っ  
ているからだ。

だが・・・

\*\*\*スカリエツテイのアジト\*\*\*

「単独任務、ですか？」

「ああ。いやかい？」

「いえ。ただ、今現在クアット口を含め妹たちが作戦を行っているのになぜ私が」

「なに、スポンサーからの頼みでね。この間も見つけたんだが邪魔が入ったんだよ。」

で、ガジエツトがまたターゲットを捕えたんだ。これがターゲット」

その標的の映像が映し出された。

「・・・これが？」

「ああ、そつだよ」

まず、男だ。誰にでもどこにいる男。

そして、ボロボロのマントを羽織っている。こっちを向いているのはガジエツトの方を向いているからだろう。

「で、チンク。いつてくれるかい？」

\*\*\*\*\*

そして、私は了承した。断る理由もないからだ。  
なのに、疑問を抱いている。

「いかな。これでは姉として示しがつかん」

そう言いつ私はガジェットに命令をくだしていた。

#### 機動六課

ここは六課の作戦司令室。今現在も戦っている彼女たちをサポートしている。

pppp

「これは」

新たな情報が入る。  
シャーリーは情報を分析するが

「ガジェットの一部隊が戦線を離れている・・・？」

「どうしたんでしょうか。陽動、じゃないですね」

「ロングアーチからライティング2。シグナム副隊長応答願います」

『こちら、ライティング2だ。どうした』

「それが、ガジェットの一部隊が戦線を離れているのが確認されました」

『陽動か？』

「いえ、ルートからして違うと思われます。ですから」

『了解した。念のため調査してみよう』

「お願いします」

## グレイヴ

グレイヴはガジェットが来にくいビルの中に入りながら移動していた。

小型から大型。外ならその機動力を生かせるが内部ならうまく半減できるかもしれないからだ。

ただ、先ほども言った通りこれは逃げるためではない。

そして、少し広い通路に出た。

「ここで、いいかな」

振り返る。

数十秒後。ガジェット？型が10機・？型が3機

彼は腰に備えつけられている奇妙な形をした銃を手取る。

「さあ、久しぶりの戦闘だ」

チンク

「数が減っている？」

チンクはグレイヴが戦闘を行っている近くのビルからそれを眺めていた。

データリンクで表示されているが次々とガジェットが落とされている

く。

ドクン

なんだ、この胸の高まりは  
右目が疼く

そうだ。これはあの時、騎士ゼストと戦った時と同じ感覚だ。

「・・・ふ」

チンクは不気味な笑顔を浮かべ、彼がいるビルへと向かった。

シグナム

シグナムが訪れたのは戦いは終わったすぐあとだった。

「これは・・・」

残骸をみる限り、撃たれ、斬られたあとがよくわかる。

そして・・・彼女はあるものをみつける。

「これは、薬莢か」

しかし、それはカートリッジシステムから出る薬莢ではない。  
これは、銃の、質量兵器の薬莢だ。

しかも、たくさん。

ドオオオオン

少し離れた場所で爆発が起きた。

シグナム一戦交じる覚悟で爆発のあった場所へと向かった。

グレイヴ・チンク

ガジェットを倒し、場所を移動していたグレイヴにチンクが不意打ちを仕掛けていた。

「君は一体!？」

「.....」

「どうして僕を狙う！」

「それがドクターの意思だからだ！」

「ドクター!?!」

今、二人は近接戦闘を繰り広げていた。

チンクは、愛用のスティンガーを。そして、グレイヴの銃の柄グリップの真下から半透明なエネルギー上の棒が飛び出していた。

(そつだ、この感覚。私は今、この戦いを楽しんでいる)

「!」

グレイヴは咄嗟に間合いを取り銃口を彼女に向ける。

一瞬の間を置き、引き金を引く。

D A D A D A D A D A D A D A D A D A ! ! !

チンクは、かわししながらスティンガーを投げる。  
マントを少し掠るものの彼には当たらない。



そのいくつかのステインガーは彼の背後、また床に突き刺さる。

今だ！

「ランブルデトネイター！」

「-!!！」

彼女の叫びと共に、先ほどのステインガーが爆発する。  
グレイヴは爆発に巻き込まれた。

「はあはあ・・・どうだ」

煙が晴れる。

しかし、彼は死んではいない。倒れてはいるが。

「あ、危なかった・・・」

そついいながらも彼は立ち上がる。

「思った通り、かなりのやり手と見た」

「・・・そうかな」

カシユ・・・カチャ

マガジンを交換するグレイヴ。

再び互いに睨みあう二人。

不思議だ。自然と体が動く。戦い方なんて知らないのに

私は、駄目だな。今、この時が最高に楽しい

二人の思いは別だ。しかし、二人ともある意味楽しんでいる。  
あのグレイヴでさえもだ。

だが

ドオオオオオン！

こことは別の場所で爆発が起きた。

「ち、見張り用のガジェットが。機動六課か」

どうやら、邪魔が入ったようだ。  
それは、グレイヴにもわかった。  
しかし、グレイヴはとんでもないことをいい出した。

「いきなよ」

「どづいうことだ」

「別に。ただ、僕は君を倒す理由はないからね。それに、女の子はあまり傷つけたくない」

「私を殺そうとしてたくせにか」

「そんなことはないよ」

「気づいていないのか？」

チンクは戦いながら彼の不可思議なことに気付いた。  
彼が戦いの中で一瞬見せる顔を逃さなかった。

それは、楽しんでいる顔だった。

「……貸が一つできたな」

「別にいいよ。それと、名前教えてくれないかい？」

「……変な奴だ」

そういいながらもチンクは自分の名を伝える。

「?5チンクだ」

「自分を番号で呼ぶのは悲しいことだよ」

「・・・」

ドオオオオン!!」

「早く行った方がいい」

「そうみたいだ。それと、お前の名は?」

「グレイヴ。さあ、早く」

「ああ」

「また、君とはどこかで会う気がするよ。チンク」

「私もだ」

互いに笑顔をみせながらチンクはその場を去った。そして、シグナムが彼のいる場所とたどり着いた。

「機動六課だ、そこを動くな！」

「……」

「お前は、リユージェ？なぜ、ここにいる」

「さて、どうしてでしょうか？」

それから間もなくして戦闘は終結した。

しかし、グレイヴは再び六課に連行されるのだった。

## 衝突（後書き）

少しですがリイン登場です。

理由はプレシアたちと同じですがちゃんと回想も書く予定です。  
今は、グレイヴを六課と行動させるか、いつも通りさせるか悩んでいます。

少し、いけば後者になると思うんですけどね

では、また次回で

## 協力（前書き）

活動コメントをみるとセンター試験を人が多くいるのをみかけます

こういうのもなんですけどセンター試験つていまいちどついうのかわからないんですね

常識が欲しい・・・

## 協力

\*\*\*機動六課 特別取調室\*\*\*

先の戦闘で再び機動六課に連行された“リユージェ”ことグレイヴ。彼が今いるのは先日の取調室とは少し違う。

先日の方は至って普通の部屋。

そして、今いるのが簡単に言えば犯罪者用の取調室と言ったところか。

一番の特徴は椅子だ。

両手、両足、胴体、そして首に強化型バインドがグレイヴを拘束している。

今度はシグナムではなく部隊長である八神はやてが尋問をしている。また部屋の隅に隊長陣が囲っている。

「こうして、直接会うのは初めてやんね。リユージェくん」

この時、グレイヴは思った

あ、そう名乗ったんだっけ。めんどくさいな・・・

「あ、それ嘘」



「は？」

「リユーゲって名前、嘘」

「貴様、私に嘘を吐いたのか」

僕の前にはシグナムの目つきが怖い

「リユーゲってドイツ語で嘘って意味なんだよね。  
わからなかったらググるといいさ」

「じゃあ、本当の名前は？」

「グレイヴ」

「グレイヴ・・・？」

「で、あんたは？」

人の名前を聞いておいて自分の名前を教えないとはなんとる不良娘だ。

まあ・・・知ってるんだけど仕掛けてみるか

「そつやね。私の名前は八神『はやて』・・・知ってるんかい」

「そつちのサイドポニーが高町なのは。金髪がフェイト・“テストタロツサ”。

デカい姉ちゃんがシグナム。ちっこいのがヴィータだっけ」

「なんで、あたいの名前知ってたんだよ」

「なんででしょう?」

「私たちの名前は前に私が教えたからな。

しかし、私はフェイト・T・ハラオウンのことは教えたがテストタロツサとは教えてないぞ」

「君たちのことはよく知ってるよ。

P T事件で首謀者の娘と闇の事件の原因となった娘だからね」

『!?!?!?!』

彼の言葉にその場にいた全員が驚愕した。

「なんで、それを知ってるんや。シグナムから聞いた話じゃ、あんたは次元漂流者って聞いてるで!」

熱くなるのが子供だよね……

「簡単さ。見てたから。それだけ」

「見てた？」

「さあね」

「テメエ・・・」

「そう、熱くなるなよ。ぺろぺろキャンディーあげよう」

と拘束されているのにごごから出したのだろうか。  
手にはキャンディーを持っている。

「お、サンキュー」

ちよろいな

「ヴィータちゃん、ちょっと出てようか」

なのはの声が冷たく鋭い。

「で、報告にあったように某ビルでの戦闘でガジェットを撃破したのはあんたで間違いないか？」

「言い訳しても無駄だぞ。破壊されたガジェットは質量兵器によって破壊されたと検証でわかっているし、なにより現場に大量の薬莖

が落ちていた。そして、お前はあの場所にいた。お前がやったと裏付けられる」

「まあ否定はしない」

「で、ガジェットが破壊された場所から少し離れたところでお前は  
何と戦っていた？」

何と、誰とは言っていないから気付いていないのか。

チンクのことには喋りたくないし・・・

「相手は見えなかったのでわかりませんでした」

嘘言ってるように見える、シグナム？

正直に言えば、嘘。だと思います。

しかし、我々にはそれを証明することができません。

んゝまあ、とりあえず

ガチャン！

「で、牢屋いき・・・」

というか留置場？

こんな場所でもあるんだと少し関心した。

ただ、残念なのは外を眺めるところがないぐらいか。

外は今頃夜だろう。

(すずか、心配しているかな・・・)

\*\*\*月村家\*\*\*

大学から戻ってきたすずかは、荷物を自分の部屋に置いてグレイヴの部屋へ向かった。

しかし、ノックをしても出なかったので入室したがそこには誰もいなかった。

「・・・また、どこかに行ったのかな？」

パフ

そのまま彼が寝ているベッドに倒れこむ

「グレイヴう・・・」

今頃どうしているのだろうか。

危険な目に遭っていないだろうか。怪我はしていないだろうか。

もう、心配で心配で仕方がない。

しかし、これは今に始まったことではない。彼がこの家に住みつきそれなりに月日が経ったころ。彼は今のようになどどこかへいくようになった。

なにかを探しに

もう、彼とは赤の他人でない。

私にとっては家族であり、兄のような存在でもあった。

……でも、本当にそれだけなのか？

自分でもよくわからない

「グレイヴ」

彼女は再び彼の名を呟いた。

\*\*\*機動六課 部隊長室\*\*\*

先の取り調べの後、はやてとなのは、フェイトが彼について話し合っていた。

「で、今後彼をどうするの？はやて」

「ん〜、それなんよね。実は、シャマルのところで前回とは違って精密検査をしたんやけど、彼、魔力保持者みたいなんや」

「次元漂流者で魔力も持つてるんだ。本人は気付いてるのかな？」

「多分、気付いてると思う。現に、ここから抜け出したから」

「すごいね」

知れば知るほど不思議な人だと三人は思った。

「でも、一番は」

「うん。私たちのこと視てたって」

「あの頃からというともう10年も前。でも、全然気づかなかった」

「聞いても喋らないだろうし」

「でもさ、逆算するとだよ？彼、同じ子供だったんでしょ？尚更可笑しいし、それじゃあ次元漂流者とも言いにくいよね」

なのはの言うことはもつともだ。  
そう考えるなら彼は彼女たち近い年頃だし、  
なにより地球にいたのだ。

「でも、私としては一番気になったの……名前なんだよね」

「名前？」

「だって、グレイヴって……墓って意味だよ？」

「……彼の親はどんな意味でつけたんだろうね」

翌日

\*\*\*機動六課 留置場\*\*\*

グレイヴは生まれて初めて、いや自分が生きてきた中で初めて留置場で寝泊まりした。

「……………」

目が覚める。



寝心地はよくはない。暖房が効いていたのか寒くはなかった。昨日の夕飯はまあ、こんなところに入れられているのにまあまあだった。

正直、さすがの家のメイドが作る料理のがおいしい。

それから体内時計で10時を過ぎたあたりにあのプレシアの娘とシグナムがやってきた。

「なんのよう?」

「釈放です」

「はあ?」

訳の分からないまま俺は釈放された。手にバンド付きで。

捕まった犯罪者の気持ちが少しわからなくはないような気がした。

\*\*\*部隊長室\*\*\*

「さて、グレイヴはん。よく眠れた?」

「まあ、それなりに。」

「で、なんで僕を釈放したんだい?」

「理由はいろいろある。けど、君は誰にも危害を加えてない。逆に狙われている立場。しかし、こちらとしては質量兵器の保持というだけで君を逮捕できる」

「周りくどいな。何が言いたいんだい？」

「単刀直入に言う。グレイヴはん、私らに協力してくれへん？」

「断ります」

「なぜ？」

「理由がない」

「けど、このままだと君は逮捕や」

目の前で笑顔で言ってくる。

少し、むかつく。

「質量兵器で逮捕？確かに、“こっち”ではそうだろうね。でも、僕の世界ではそれが当たり前。身を守るために必要なもの」

「君の言い分もわかる。けど」

「けど、なんだい。正直言うけど、“地球”でもまあ、日本で言う

なら銃刀法違反で逮捕だろうね。でもアメリカや物騒な国じゃあ、普通に持つてるし、子供だって買える。ようは、モノの見方の違いだよ」

「そんなん知つとるよ。でも、ここはミッドチルダ。地球とは違う」

「ああ、そうだよ。でも、僕は誰も傷つけないし、危害も加えていない。

喋ることは喋ったし、とつと帰りたいんだけど？」

「話を逸らさないでくれる？」

とりあえず、無視。

それと、情報だけはもらっていかないと

「そうそう、聞きたいことがあったんだ。

あのガジェットでなんかしてる奴、まあ黒幕だれ？」

「質問を質問で・・・」こっちは答えたことは答えたんだけど？」・・・

ええやる。今回の事件の首謀者の名はジェイル・スカリエッティ。  
広域次元犯罪者に指定されている男や」

・・・・・・計画通り（にやり）

もとい、上手く誘導できたな。  
今起きている事件の黒幕もわかったし。

「じゃあ、協力するから帰らせていただきます」

「「「え?」「」」

すると彼は来た道を戻る。  
扉の一步手前で彼女たちは我に返る。

「ちょ、ちょっと待ったー!」

なのはがあわてて彼の手を取り足を止めさせる。

「なに?」

「本当に協力してくれるの?」

「先ほどそういいましたが?」

「なら、なんで帰るって」

「自分にも帰る場所がありますから」

「あ、そうなの？」

「ええ、では」

そういうと彼は部隊長室をあとにした。

彼女たちにしてみれば、彼をこのまま野放しにしておくのはいいとは言えない。

しかし、彼は得体が知れない。

そして、間もなくして。

彼から取り上げた魔道書と銃を持って、消えたという報告が入った。

協力（後書き）

急な展開だと思えます。はい

実は最初は協力せず逃げて敵対に近い形になる予定でした

しかし、それではもっと急展開すぎるのでやめました

では、また次回で

だけど、ここは違う(前書き)

お久しぶりで

もう2月ですねー

だけど、ここは違う

\*\*\* 聖祥大学 \*\*\*

「はあ」

大学の講義の中、月村すずかはあまりいい気分ではなかった。理由は、簡単。彼、グレイヴのことである。彼は珍しく一日で帰ってきた。彼女は喜んだ。しかし、彼は唐突に言った。

「すずか、実は僕働くことになったんだ」

驚いた。

なぜ？と思わんばかりに。

理由を聞いてみると彼は言った。

「ある人にあつてね。働いてみないかって」

それだけでは納得できない。



しかし、続けて

「そこは、まあ珍しい所でね。世界中からいろんなものを取り扱ってるんだって」

なるほど。

彼らしい言えば彼らしい。

世界を旅して珍しいものを探しに行っているのだから。

すずかは渋々了承した。

だから、今の彼女はあまり気分がいい方ではない。  
むしろマイナスだ。

アリスちゃんにはすぐばれてしまうがグレイヴのことは言うのはやめておこうと心の底にとどめておいた。

言ったら私と同じくらい落ち込むだろし・・・なにより、怖いから。

一方グレイヴは・・・

\*\*\*ミッドチルダ 機動六課\*\*\*

あの件から数日が経ち、今日も彼はここ、機動六課に出勤していた。

そう、出勤しているのだ。

ただ、彼の場合、朝晩は月村家ですごし、昼は六課。もちろん、家のことは言っていないし言ったらとんでもないことになるからだ。

「……」

正直、彼は乗り気ではなかった。

本来ならばあそこで雲隠れして逃げるつもりだったが、そうはしなかった。

なぜか

彼は、興味を持ったとも言える。だが、もっと深い所であれば自分を狙ったと思われるジェイル・スカリエッティに近づけると思ったからである。

そして、もう一つ言うならば。

ここに居ればなにかが起こる。そう、思っていた。

そして、今彼は六課内の通路を歩いていた。

最初に言っていくが彼の服装は至って普通だ。今までのようにボロボロのマントを羽織ってはいない。（種運命のキラがきている私服）

ちなみに、六課はもちろん制服なので私服でいるグレイヴはとても目立つ。

局長たちの視線が歩くたびに目に入る

(・・・わかってたけど、なんかやだな)

「ヤッホー、グレイヴくん」

唐突に目の前に現れた管理局のエース・オブ・エースと呼ばれている高町なのはが現れた。

「・・・高町さん」

「いいよ、なのはで」

「じゃあ、なのはさん」

「もう・・・べつにいいの」

彼女はなぜか残念そうな顔をしている。  
なぜだ？

「で、なんのよう？」

「特に用はないんだけど・・・」

「あ、そうですか」

てくてく・・・

「て！ちょっと待ってよ！」

「なにか？」

「なにつて、そんな酷いでしょ！？」

だから、なにが？

そんな顔を彼はしている。

え、なに。理由がないとしゃべらないって言いたいの？

「もぉ・・・ただお話がしたかっただけ。いいでしょ？」

「いいよ」

意外と率直に返答された。

場所は移り・・・

「グレイヴくんって年上だったの?!」

「うん、そうだよ。これでも、二十歳過ぎてるし」

「……いろんな意味でありえない……」

場所を移してからかなり会話をしているがこれが意外と弾んだ。

彼の話は面白いし、ないより今さっき年齢のことを聞いたら年上だ  
って言うし。

そのあとも、いろいろ話してから別れた。本当は、もっといろいろ  
聞こうと思っていたのだがそうそううまくいかないものだった。

……

なのはと別れたグレイヴは外に出ていた。少し辺りを歩いてベンチ  
があったのでそこで空を眺めていた。

自分は今こんなところでなにをしているのか。こんなことをしていな  
いでいつものように旅をしないのか。

それに、こんなところにおいても自分がほしいものは手に入らない。

彼は苦悩している。辛いほどのことでないがそれでも悩む。

「はぁ・・・」

溜息をつくとき幸せが逃げる。そういうがそれでもつきたくなるものだ。

「お兄ちゃん・・・なにしてるの?」

「・・・」

気付けば目の前に小さな女の子がいる。珍しく目がオッドアイである。

少女をみたと同時に脳に痛みが走る

・・・ザッ・・・ザッザ・・・ザッ・・・

ザッ・・・ねえ・・・お兄ちゃん・・・ザッ・・・世界・・・ザッ・・・好き・・・

「うっ」

頭を押さえる。押さえたところで痛みは引かない。だが、痛みは一瞬だった。

「お兄ちゃんだいじょうぶ?」

「あ、ああ。大丈夫だよ」

「お兄ちゃんだれ？」

「僕かい？僕は、グレイヴ」

「ぐれいヴ？私、ヴィヴィオ」

「そう、ヴィヴィオちゃんっていうんだ」

不思議なことだと思った。

そして、普通の子ではないとも思った。

「ヴィヴィオ〜どこ？」

「あ、フェイトママだ〜」

そついうとヴィヴィオはフェイトの方へ向かった。

フェイト・・・テストロッサか。

資料をみたときになのはとフェイトが保護している。

「・・・ここの人たちは本当に良い人ばかりだな・・・」

彼は笑っている。寝ているのかそれとも・

「・・・寝よ」

彼は静かに目を閉じ眠りについた。

夜7:00過ぎ

「・・・寝すぎた」

気付けばもう辺りは暗く街灯が照らされている。  
なぜ、誰も起こしてはくれないのか。

まあ・・・考えなくてもわかるか。

とりあえず、帰ろう。

彼は、朝に出勤。夜に帰宅。唯一それが認められている人物だ。  
別にそれがトップである八神はやてに認められているからここで帰  
らなくても特に問題はない。

「さて、帰ろうかな・・・ん？」



帰ろうとした矢先彼は何か気がなってそこに向かった。  
そこは、少し辺りから見えずらい場所に位置している。そんな場所に一人の少女がなにやら特訓をしていた。

「あれは・・・ティアナ・ランスター」

彼女のことも資料で一通り目を通した。  
ちよつと、前にかなり隊長たちと揉め事があつたらしいがそれは今では解決しているらしい。

「ッ！」

彼女のデバイスは銃の形をしている。それも二挺だ。  
二挺銃を使うのは相当の熟練者ではないにしろかなり扱いが大変だ。  
一丁とは違い戦略の幅も広がるが弾倉の交換なども時間をとられる。  
しかし、デバイスにも弾倉を交換するが一発のカートリッジでかなりの量を撃てる。

まあ、それはともかくグレイヴはティアナの特訓をみていた。

彼もまた銃を使う。共通する部分があると思つてみていた。というわけでない。  
逆に甘いと思つていた。

彼女は宙に浮かぶ球体に銃を向けて動いている。

あんなものよりもっと仮想の敵をイメージしてやった方が効率がいい。

だが、それもそういう事になんとも経験していればの話だ。

それに彼女は、目先のことばかりみている。自分の目だけで戦うのは悪い。

耳や鼻、さらに言えば五感を澄ましてやるべきだ。

もっとも、実戦ではそういうのを含め大半が経験で動いている。

実力もある。しかし、運だけでは生き残れない。

グレイヴはそう思っていた。

「……ふう、今日はこのくらいにしましょう」

気付けば彼女は動きを止めていた。

ティアナはあの一件からも自己鍛錬を続けていた。しかし、ちゃんとなのはのいいつけを守ってだ。

そして、ティアナはやっとグレイヴの存在に気付いた。

「あ……」

「……こんばんは」

「こんばんは。もしかして、みましたか？」

「あーうん」

別にみられて恥ずかしいわけではない。ただ、彼のことは聞いていたがこうやって話すのは初めてだったからだ。

互いに何を喋ればいいのか少しの間無言の時間が流れたがまず、グレイヴが口を開いた。

「腕に力を入れるより、手にグリップを握る手に力を入れた方がいい」

「え？」

彼はいきなり言いだし、さらには彼女の手を取り銃を構えさせ指摘する。

「それと、弾倉・カートリッジの交換は遅くて3秒、早くて1秒から2秒の間」

「は、はい」

「これは、もう普通の鍛錬や経験でしか会得はできない。あと、二挺拳銃は手がすでに制限されている。相手に接近されたとつする？」

「一応、ダガーモードって言って。接近戦用の形態もあります」

「それも、いいがそれに移行するまでに時間が数秒かかる。だったら、無理にする必要ない。そうしなければナイフを、剣を止められない？違う。銃でも受け止めることは可能だ」

気付けばティアナは彼の話を熱心に聴いていた。

「銃・君の相棒が傷つくのがいやと思うのならやめた方がいい。自分だけ傷つく。そんな考えは捨てた方がいい。それと、もし接近戦闘に陥った場合どうすべきが。ジュウクンドーというのを身に着けることを進める。」

「ジュウクンドー、ですか？」

ティアナはそんなもの聞いたことがなかった。

「所謂、銃拳法。如何にして戦うか。簡単に言えば銃が自分の拳とでも思えばいい。」

銃で受け止め足を使い相手を蹴り、怯んだところに銃弾を叩き込む。簡単そうで難しい」

「私に、できますか？」

「君次第だよ。ランスターさん」

ティアナが熱心に聴いていたのには理由がある。それは、教官でもあるなのとはまた違った視点で教えているからだ。なのはの場合では魔導師として、また自分と同じポジションだから。逆にグレイヴは銃使い。銃ならばティアナと共通しているしなにより銃の扱いはなのはでは教えるのには限界がある。彼女は杖なのだから。

「その・・・ご指導ありがとうございます」

「礼ならいいよ・・・それじゃ」

彼はそういつと消えた。

ティアナも彼を見送ったあと部屋に戻った。

\*\*\*地球 月村家グレイヴの私室\*\*\*

ザッ・・・違う、腕に力が入り過ぎだ・・・ザッザッ・・・

・・・ザッ・・・はい・・・ザッ・・・

ザッ・・・当てるのは心臓じゃなくてもいい。無駄に頭に当てようよ・・・ザッ

ザッザッザッー

「あああ……痛いっ」

『大丈夫か？最近は大丈夫だったのだろうか』

声をかけているのはリインフォース。彼女は、彼が心配で彼の肩に手を置いていた。

元々彼女はプラグラムで実体化していた。だから、そのまま蒐集したから彼に触れている。というわけではない。

現に、彼女の以外プレシアも彼に触れている。

『やっぱり、何かトリガーになってるのね（まあ、それがきっかけ元々の記憶が戻るうとしているのだけど）』

「……大丈夫。それで、話して」

『ああ、そうだったわね。ジェイル・スカリエッティのことなんだけど年をとったせいかな忘れてたわ』

そついうと彼女はいきさつを話した。

彼が提唱した理論によってフェイトが生まれたと。

しかし、彼は人間性としては少し可笑しな部類に入ると言っていた。

『それと、あなたと交戦した女の子。たぶん、戦闘機人ね。資料でしかみたらないけど、所謂サイボーグみたいなものよ』

「そう、か」

『しかし、いいのか？旅はしなくて？』

「旅の目的・・・は、自分探しの旅でもあった。だから・・・」

『・・・』

プレシアとリインは顔を見合わせた。

彼がそう言うならしかたないと納得したのだ。

「でも・・・」

『・・・？』

「あそこに長居するつもりはないよ」

『どづしてっ？』

「あそこは・・・」

彼は思い出す。あそこにいる人たちの顔を。笑っている。光に満ち溢れている。

しかし、自分が求めているものはあそこではない。

それに・・・

「あまり好きになれない」

だから、月村<sup>つきむら</sup>家でいい。



だけど、ここは違う（後書き）

最後で、なんでプレシアとリインが実態である彼に触れることができたのか？

それは今はまだ明かせません

では、次回で

先に動くのは(前書き)

先に動くのは

\*\*\*ミッドチルダ 某所 発掘調査隊\*\*\*

ここは、ミッドチルダにある、とある発掘場所である。  
遙か昔、古代ベルカの時代遺物跡というのがまれにある。あまり、  
遺跡というのはないが今現在でも当時について詳しく明記されたも  
のは発見されていない。

そんな発掘調査隊の日和がある奇妙な箱をみつけた。

「これ・・・なんでしょうね」

「まあ、箱だろうな」

ボロボロの箱。

所謂、お宝と言い換えても過言ではない。

そして、発掘者としてまた、一人の人間としてはこれを開けたいわ  
けで・・・

ガチャリ

開けてしまっわけですよ。

わくわくしながら開けるとそこには・・  
綺麗な二挺の銃が納められていた。

「これ・・・銃ですか？」

「そうだな・・・。こういうのはあまりいじらない方がよさそうな  
気がしてきた」

「今回だけは同感です」

「よし、マニュアル通り聖王教会に調査してもらっか」

彼らは一応聖王教会から依頼を受けて発掘をしている。  
だから、みつけた発掘品は聖王教会に送らなければならぬのだ。

だが、この時たったこれだけのためにあんな大事な騒ぎになるとは  
この時誰もが思ってもみなかった。

\*\*\*機動六課\*\*\*

グレイヴが六課に勤め初めて早2週間。軽い出撃などはあったものの大きな事件になるようなことはなかった。その間、グレイヴがすることと言ったら事務仕事。彼は優秀で一回教えればもう、次からは普通にこなしていた。

そんなある日、六課にとある任務が依頼される。一応グレイヴも話だけには参加していた。

「で、依頼は？」

「依頼先は聖王教会からや。なんでも、発掘した品を教会に届ける護衛任務や」

「ふーん。ところで、どんなものが発掘されたの？」

「ああ、それやったらカリムから一部写真もある。これや」

表示されたのは文献やら文字やらだった。グレイヴはそれを見て軽く流そうとした。だが、次にみた写真をみて彼は自ら行動することになる。

見つけた・・・見つけた

「なにこれ？銃？」

「なんでも、これが一番の目玉らしくてこんな綺麗な状態で発見されたのも珍しいからもしかしたらロストログアの可能性もあるとかないとか考えているらしくてな？」

「へー、すごいね」

「というわけでこの任務には『僕も参加させてくれ』え？」

その場にいた全員が目を疑う。

「なんでや？」

「興味があるからね」

「そっか。グレイヴくん珍しいものを集めてるんだっけ」

「ええ、けど盗んだらあかんで（笑）」

「わかってるよ」

この時、彼女たちは笑ってごまかした。しかし、誰も気づいていなかった。まさか、あんなことに巻き込まれるなんて。

\*\*\*スカリエツティアジト\*\*\*

「とある物資の強奪？」

「ええ。たったそれだけでよいのです。別にあなたの娘たちではなくあの機械を出してくればよろしい」

「別にかまわないよ。君たちは僕のスポンサーでもあるからその分は協力を惜しまないさ」

とある一室にて一人の男と今回の事件の黒幕であるジェイル・スカリッティがなにやら交渉していた。

「しかし、今度は強奪。いいのかい。例の彼を探さなくても？」

「我々の情報ではあなたが敵対している組織にいるようです」

「へえ、あの機動六課に。しかし、彼は何者なんだい？魔導師でもないのにガジェットを破壊できる」

「それは言わない約束です。ドクター」

「おっと、そうだったね」

「では、ガジェットを200機ほど借りていきますね」

「はい」

「まあ、返ってくるとは思わないことですね」

「僕もそう思うよ」

二人とも互いに呆れた顔をしながら別れた。

彼のアジトを後にした男。彼は端末を取出しある場所に連絡していた。

「はい、私です。予定通りです。あとは、誰にやらせるかですが・  
・ええ。

なら、ルーキの彼にやってもらいましょう。確か彼は面識があったはずですから」

\*\*\*夕刻 空港物資搬入所\*\*\*

今回任務に参加するのは隊長陣らだけである。もし、ガジェットなどが出た場合はどちらからの部隊が離脱する手はずになっている。

なのはとヴィータ。フェイトとシグナムは車で護衛。さすがに夜と



はいえ戦闘モードでは目立つし、なにより護衛の意味がない。

グレイヴは護衛のトラックの中。中には、教会の関係者が二人同行していた。

護衛であると同時にこの中にあるすべてを管理している。だから、鍵も持っている。

そして、グレイヴは時を待った。

それから間もなく彼の計画は始まった。

キィィィ!

トラックが急停止する。

目の前にガジェットの大群が迫ってきているのだ。

「いくよ、みんな!」

彼女たちは空にあがる。

また、グレイヴも行動に移る

やっと・・・見つけた・・・見つけた・・・

頭に響く声。

わかっている。わかっている。わかっている。僕は・・・ここに



先に動くのは（後書き）

さて、そろそろこの作品のプロローグが終わりに近づいてきました。

え、プロローグ？

と思った方。そうなんです。

実は、まだこれは始まりではないのです。

話ではなくグレイヴのが。まだなんです。

あまり、グレイヴという人格がつかめていないと思う？んですけどそれは次回で明らかになります。

それでは次回

## 目覚め（前書き）

いやー雪すごいですね。寒くて部屋から出れない

## 目覚め

空港から数十キロ離れた地点

空港から護衛を受けて間もなく襲撃を受けた。  
前後からガジェット大群が現れ、迎撃にいく隊長陣たち。

「スターズ1からロングアーチ。サポートよろしく！」

『了解。敵ガジェットは全機でおよそ200。それが、100機ずつ展開しています』

「了解。・・・グレイヴくん、聞こえる？」

『聞こえます』

「トラックは、安全が確保できるまでその場で待機。いい？」

『了解』

「それじゃあ、いくよっ」

戦闘が始まる。隊長たちにとってガジェットは大した敵ではない。数も今までにしては多いがガジェットだけならさほど時間はかからない。

しかし、グレイヴにはその短時間させあればちょうどよかった。

トラックの荷台

「戦闘始まったが大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

グレイヴと一緒に乗っているのは教会の関係者。おそらく警備員みたいな者だろうとグレイヴは思っていた。黒髪の男と金髪の男がいた。

「あなたも六課の人なんですか？」

「ええ」

「すごいな。今じゃ、それなりに有名だしな」

「そういえば、見つかったっていう珍しい銃って」

「ああ、これ？」

そういって、目線で示したのは厳重に保管されているアタッシュケース。

「そうですね・・・！」

そして、グレイヴは近くにいた、黒髪の男を手刀で気絶させた。その出来事に驚いたもう一人の男は恐らくデバイスかなにかを起動させようとしたのだろう。

だが、グレイヴは容赦なくその男の右足を撃った。

「あああ！！痛い、痛いよ！」

「命はとりはしません。そのケースを開けてもらうか」

グレイヴの声は統一できていない。

だが、その鋭い目は容赦のない目をしている。

「な、なにが・・・もくてグフツ」

喋ろうとした男の腹にけりを入れる。

「いいから、言う通にしろ。命だけはとらないって言ってるんだ」

「・・・」

男は、素直に従うことにした。  
男にもわかっていた。たとえば、デバイスを起動させるよりもグレ  
イヴが撃つのが早いと。

「それでいい。これで、やっと　　．．．．．来たか」

．．．．．

なのはたちは順調に敵を倒していた。  
ガジェットの数が半分を切ると．．．

ドッカーン！！

いきなり大きな爆発音。爆発したのはなのはたちが乗ってきた車だ  
った。

「え？」

「いったいなにが　テストロツサ！」

「くっ！」



するとフェイトに一発のロケット弾が襲う。  
間一髪のところまで障壁防ぐ。

「これは・・・」

「質量兵器かよー！」

パチパチ・・・

すると、拍手する音が聞こえる。

「いやー流石です。質量兵器でも歯が立たないとは」

「あなたは・・・」

暗い中から現れたスーツに身を包む謎の男。

「悪いですが名乗るわけにはいかない身分です。単刀直入に言います。あのトラックを我々に渡していただきたいのです」

「素直に我々が渡すと思うか？」

「渡していただかないとこちらとしても困るんですよ。私としてこういう手段はとりたくないですが」

彼は手を挙げた。すると

「おい、おいやべえな」

ここは一般の道路だ。だから、近くには大きなビルなどもある。そんな場所で戦っていたのに被害が少ないのは彼女たちの技量がモノをいう。

だが、逆に市民を守る立場にある彼女たちにとっては不利な場所でもある。

そんな場所は悪党にとっては絶好の場所なのだ。

ビルの中、屋上道路のあちこちに黒いスーツをきてサングラスをしている男どもがたくさん現れた。質量兵器をもって。

「我々としては、質量兵器がどの程度魔導師に通じるか気になるところですが・・・」

「・・・あなたたちの目的は？」

「あなた方に話す理由はありません。素直にいう事を・・・聞くわけありませんか」

『?』

もちろん、その通りだ。だが、なぜ?と思わんばかりだ。

「色々とあなたたちのことは知っていますので。では・・・」

彼が再び手をあげ・・・振り下ろした。

すると、数発ロケット弾がトラックへ迫る。気付いたのはたちが防ごうと動くが銃弾によって足止めされる。

そして・・・

ドオオオオン!!!!!

「ああ、ああ・・・グレイヴくん!」

「・・・グレイヴ・・・?まさか・・・」

トラックはもう原型をとどめていない。今も炎上している。

「さて、上からはついでに敵も排除しろと言われてますし・・・」

『!』

「悪く思わないでください。これも、仕事なので」

「やっぱり、悪党は悪党だな」

「悪党？それは違います。我々は正しい。正義、とまではいきませ  
んがね」

「なに？」

「では、さようなら」

そして、手を振り下ろすその瞬間 DON……

『？』

『？』

一発の銃弾が静止の合図になった。  
それが静止の合図になるとは皮肉と言える。

「誰だ？撃つたのは？」

しかし、部下たちは誰も撃っていない言う。

コツ・・・コツ・・・

足音が静かに聞こえる。

誰も歩いてはいない。いや、歩いているから聞こえるのだ。

そして、なのはたちも黒ずくめの男たちもその音が聞こえる方へ顔を向ける。

そこには、炎上しているトラックしかない。

赤く燃えている。しかし、幻か・・・人の影が見える。

それはだんだん、大きくなっている。

「はあー。ん、ん」

ゴキゴキと骨を鳴らしながらその姿を現す。

「ぐ、グレイヴ・・・くん？」

「まさか・・・あなたは・・・」

「その声・・・カールか」

「やっぱり、生きて・・・いたんですね！」

なのはたちは状況が読めなかった。死んだと思った彼が生きていた。でも、今までと違う。

しかも、自分たちに敵意を向けていた男は彼とまるで再開のような感じをしている。

「……いるんだろう。出てこい」

「え？」

パチパチ

すると再び拍手の音が響く。

「いやー、感動の再開ですか。もう、涙が止まらなくてハンカチが何枚も出ちゃいますよ」

「ゼフィロス様！」

「カール君、喜ぶのはいいですが彼は裏切り者なんですよ？」

「うら、ぎりもの？」

なのはは呟いた。

「?1。俺を殺しに来たのか？」

「ええ、まあ」

『……』

「カール君帰りますよ」

「し、しかい」

「作戦は失敗です。あの銃が彼の手に戻った時点でね」

そう言うと、なのはたちは初めてそれ気付いた。護衛の対象の一つだった2丁の銃。それが今彼の手にある。

「帰ったらあいつに伝えとけ。グレイヴが墓に戻れず帰ってきたとな」

「ふふつ。では、そう伝えておきますよ」

そして、彼らは消えた。

消えるとなのは彼は彼に近づこうと地上に降りる。

「グレイヴくん……?」

「お前……」

「貴様、何者だ?それに奴らとどういう関係だ?!」

「……自分で調べる」

「てめえ！・・・」

ヴィータが怒り手を出す前にグレイヴの銃口がヴィータに向けられた。

「とりあえず、約束通り協力はしてやる。今まで通りに」

『・・・』

何もかも壊れた。いや、変わったのか？

後にJS事件と呼ばれる大事件が起こる。

しかし、人々には知られずもう一つ起こった事件が起こることになるということはまだ知る由もなかった。



目覚め(後書き)

というわけでグレイヴ覚醒

ん〜ちっとなにまでこねた

不穩（前書き）

やっとできた

## 不穩

\*\*\* 聖王教会 \*\*\*

今、聖王教会は慌ただしかった。理由は昨晚の輸送車爆破事故。正式には輸送車襲撃事件などが表向きはそうなっていた。教会の人間が2名死亡。物資は破壊されたまま。もともと、貴重品などはなかったが人が死んだことで余計に騒ぎだっていた。

そんなときに、一人の神父がやってきた。身長は180はあるだろうか。メガネをかけ優しい顔をしている。

そんな、彼は教会に知った顔をみつけ声をかけた。

「シスターシャツハ。いつたいなにが、あつたのですか？」

「これは、アンデルセン神父。実は 事故がありました」

彼は教会では知れた顔ではあつたが、さすがに内容までは話せなかった。

「そうですか。それと、これは借りていた資料です」

「すみません。本来ならこちらから迎えを」

「いいんですよ。今日は歩きたい気分だったので。それと、小耳に挟んだのですが。例のベルカ時代の銃と思われたものが盗まれたと聞きましたが」

「！さすがですね、神父。もう、お耳に届いているとは。……」

彼女は周りを確認し小声でいった。

「実は、その通りになります。こちらの者も亡くなり」

「そうですか・・・アーメン」

祈りをささげ、十字を描く。

「では、これ以上はお邪魔になるので」

「お送りいたしますが？」

「いいんですよ。今日は、歩きたい気分なのです」

「そうですか。では、お気をつけて」

お辞儀をし、シャツハは戻って行った。  
神父もまた自分の教会へと戻る。

「 奴が銃を再び手にしたか。??め。知っていたな」

その口調はさきほどの優しい声とは逆だった。目も殺意の目に変わっている。  
しかし、それも一瞬。いつもの優しい顔に戻り神父は教会をあとにした。

\*\*\*機動六課会議室\*\*\*

事件から数時間後。彼女たちは眠れぬ夜を過ごし、新人たちも含めグレイヴについての取り調べが行われた。  
取り調べと言ったのは彼がもう別人だったからだ。取り調べ室でしようにも今の彼は何をするかわからない。

「で、君はグレイヴくんがいいんやね？」

まずは、部隊長であるはやてが切り出した。彼は、扉の隣の壁に背を向け互いに向き合う形にいる。

「ああ」

その口調だけです。彼女たちの知っている彼と大きくかけ離れている。

「色々聞く前にこれだけは聞くで。それ、返すつもりはあらへんの？」

『それ』とは。彼の両足の太ももにあるレッグバッグのことである。そこには、護衛の対象であった二挺の銃が納められている。

「これは、もともと俺のだ。返す以前の問題だ」

「俺の。ね……。じゃあ、どうして発掘場所に？」

「知るか。俺が聞きたいぐらいだ」

「……話を換えようか。今の君とこの間までの君。まるっきり人が変わった。それはどしてなん？」

「今の俺が本来の俺だ。俺は、記憶を失っていたからな」

「それじゃあ、君が先の護衛任務に同行するといったのは」

「察しの通りだ。こいつを見て、少しだが記憶が戻ったのさ。で、こいつを手にとって完全に記憶が戻ったというわけだ」

記憶が戻る。それは、確証のない治療ばかりだ。普通に安静していればいつか戻る。

または、いままで同じように生活すればそれが鍵となり徐々に記憶が戻るなどなど。

彼の場合は特殊である。記憶を失っても自分に関連または知っていたことを認識すると脳裏にそれがささやく。それが、彼の頭痛の原因だった。

「なるほど。では、本題に入ろうか。君は何者で、輸送車を襲撃したあの黒服たちはなにものなのか。答えてもらおう」

「俺は、グレイヴ。それ以上でもそれ以下でもない。あいつらに関しては自分たちで調べろ」

「それは、答えになってません」

フエイトが初めて口を出した。執務官でもある彼女はこういったことにも携わったことがある。

「なんでもかんでも答えが出てくると思わないことだ」

彼はそういつと部屋を出ようとする。

それを、彼女たちが止めるが止まる気はない。しかし、扉が閉まる一歩直前で踏みとどまり顔だけ振り向き彼は言う。

「“世界の管理者”だ。あとは、お宅の自慢のデータベースで調べることだ」

そして、今度こそ彼は立ち去って行った。この“世界”から。

「世界の管理者。何かのキーワードですかねえ？」

「自慢のデータベース……！無限書庫っ」

「皆、悪いけど解散や。今日は訓練中止。隊長たちは休んでおいてな」

『了解』

彼の言った意味がわかるとは yet は行動に出た。  
無限書庫に連絡を取った。ユーノには悪いが早急に調査してもらおう  
しかない。

彼女たちは答えの一手前まで近づいている。

一方、彼のことで揉めている者たちも

??????



そこは、まるで円卓のようだった。椅子が13あるが座っているものは全員ではない。

そして、円卓の奥には王が座るような王座がある。

「というわけで、彼は『グレイヴが墓に入れず戻ってきた』だそうです」

13人のうちの一人。？1ゼフィロス。彼は、手品師なのか声を真似て伝えた。

それに、反応してか今いるメンバーは次々と。

「ふん。貴様は知っていたのだろう。でなければ、部隊が動くことはない」

最初に返したのは神父アンデルセン。今の彼は殺意のある眼と恐ろしまでの表情をしている。

「ここ最近ですがね」

「あいつが生きている可能性もある。当時は誰もが思っていた。なにせ、我々と同じ存在なのだから」

今度は真っ赤なコート、真っ赤なシルクハットで同じようにメガネ、いやサングラスをしている男が言う。

「アーカードの言う通りだ。しかし、つい先日までの我々は彼の存在自体を忘れていた」

今度は女性の声だ。スーツを身にまとった上から軍服を羽織っている。

「そうか？ 貴様はあいつに熱心だったじゃないかあ。バラライカ」

「ふん。似非神父が。貴様はその偽善でも世に広めてでもいろ」

「ほざくなよ。雌犬」

「まあまあ。落ち着いて。しかし、彼が再来したのは紛れもない事実です」

ゼフィロスが間に入って仲裁する。

「しかし、奴が我々に復讐をするとは思えん」

「それは、私も同じです。ただ、あの方はそれでも、存在が邪魔み  
たいです」

「あの方がか」

彼らの視線は王座へ向けられる。誰も座っていない王座に。

「それに、彼と??を含め。2つの欠番がある以上無視することはできません」

「??か。あいつが失踪してもう10年か・・・」

「裏切ったわけではないのだろうか?」

「ええ。今だから言えますが彼女は極秘任務で彼の搜索を命じられていました。もしものことということでは」

「だが、奴は現れた。??は連絡もよこさず、こちらにも帰っていない。これは」

「死んだ。ということですか?」

「ありえん。我々はそういう人種だ。死ぬことはありえない」

「こればかりはなんとも」

『・・・・・・・・・・』

\*\*\*月村家\*\*\*

すずかは自室で月を眺めていた。  
まるで漫画で出てきそうなヒロインのようだ。

コンコンッ

「はい」

誰だろうと思いつつ入室を許可した。

「すずか」

「グレイヴー！」

思わず抱き着いてしまったすずか。  
それほどまでにすずかは心配だった。

「ただいま、すずか」

「……グレイヴーなの？」

「ああ。俺は、グレイヴ（……）だ」

「……」

「……やっぱり、怖いか？」

「うん。……でも、あなたはグレイヴだから」

「ありがとう、すずか」

彼は笑顔で言った。初めて見せる本当の笑顔。  
本当は自分のことが怖いはずなのに彼女は自分を信じてくれる。

そして、グレイヴは思い出した。  
すべての、始まりのあの日を。

## 不穩（後書き）

ヘルシングのアーカードとアンデルセン。そして、ブラックラゲールのバラライカです。キャラはそのままですがちょっと違う部分があります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7318p/>

---

魔法戦記リリカルなのはグレイヴ

2011年5月7日13時04分発行